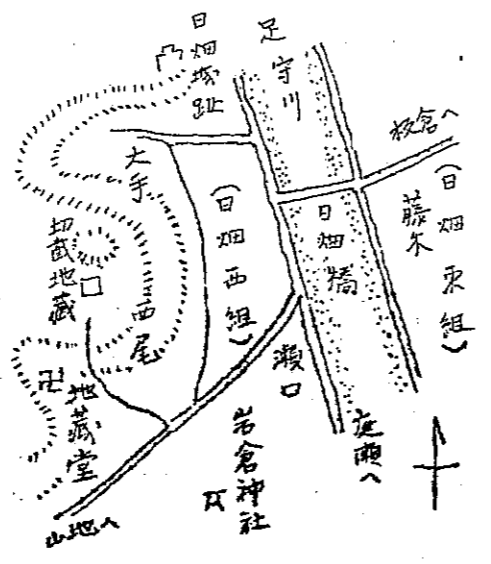


# きざねのせき

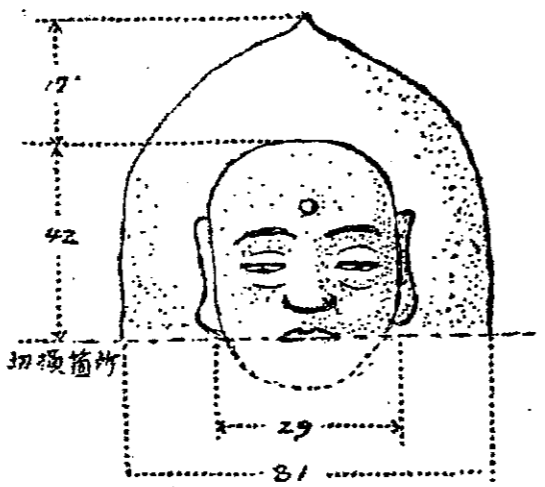
NO.23 月刊

第十輯 傳説篇 卷三  
 昭和十五年五月一日 発行 (非売品)  
 発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬七〇七 宇垣方  
 吉備観 光協会

切敷地藏尊の由来  
 左村日畑西組西尾は旧幕時代は庭瀬藩主戸川氏の領内であつた。ここに  
 地藏山といふ小山があらつて村の共同墓地がある。地藏堂の北にあつた。無  
 縁墓の中央に首から上だけの石地藏尊がある。これを俗に切敷尊きりたふ  
 一の地藏尊と呼んでゐる。傳説によると戸川氏は代々日蓮宗の信者にして  
 強制的に領内の寺院を同宗に改めるなどの政策をとつてゐた。偶寛文の末  
 三代藩主戸川お佐守安宣の時代に、地藏尊は日蓮宗には祭祀するものでな  
 い。といつてこの石地藏尊の首を刎ねて胴体と切り放し、下の部分を持ち  
 去つて戸川氏の始祖である常山城主戸川肥後守秀安を祀る尾島の徳林堂の  
 手水鉢に使用せんとし、船に乗せて足守川と下り尾島灣を横切つて宇藤木  
 の海岸へ陸揚げした。所が誤つて海中に取落した。入夫は驚いて海中を探  
 り網をかけた漸く舟に引上げたが取落すこと再三、ついに海中深く没して  
 しまつた。このことがあつてから庭瀬の御殿内では不吉のことと結んだの  
 で、占者をしてトはした處、これは日畑の地藏尊を破壊した祟りである。  
 と語つたのでその報復として庭瀬に建てた撫川の徳徳寺(鳴海宗)を再建  
 し法要を行つたといふ。  
 この胴体のない首だけの石佛は今も現地の地藏山に安置されてゐる。唇  
 の線から折られて居り、その切口の長さ八、高さ五を、額面の縦四、横二九とあ  
 る。これによつて復元すれば身長二〇。以上、背を有する石佛になる。  
 天正十年頃まで地藏堂に安置されてゐたが、宮内省普賢院(興言宗)の僧が方  
 形の無縁墓地を設け、その中央に安置して、セメントと新しい石材を用ひ錫杖  
 を持つた胸像式に修葺したのである。  
 無縁墓中に「撫川町 雄波氏先祖合祀之墓」雄波康一郎高門改作 明治三  
 十二年」とあり。その子孫は絶嗣したのである。



西尾附近畧図



切敷地藏尊見取図

三玉宮の由来  
 中撫川の周囲のなみにおよ一小時である。由来を尋ねると、口碑に昔新  
 回時代に備前勢の大軍が備中を侵襲せんと進軍して来たので、尾羽の備中  
 勢は足守川を越えて東進し、この野を戦を交へたのである。激戦に亘  
 ったが備前勢の攻撃はすくなく漸々利を失ひ、西方差して退却を開始した。  
 この時山とりの武士は戦に疲れ腰を痛め、膝を打つてこの石に腰をおろし  
 て休んでゐる所へ敵兵三、四が襲ひかゝつてきた。立上つて抜刀し、  
 二度渡り会つたが、腰の痛みを堪へぬつゝに打伏せられ、首を刎ら  
 れた。北に瀕んで云ふに、腰の痛みを堪へぬつゝに打伏せられ、首を刎ら  
 れた。

ものはいつまでも護り救ふであらう。といつて息を引きとつた。  
遺言によつて後人がその託を哀み、一小詞をたててその霊を弔つたのが  
この宮の始めと傳へている。三玉は御霊の轉訛ならんか。  
古書によるとこの附近は源手の戦、毛利、宇喜多両軍の戦、高松城水攻の  
戦の前衛などが行はれた古戦場であるが、果してどこに戦の時のものか  
わかからない。昔の塚らしい七ツ坑（グロ）といわれる跡もあり、新設した多くの勇  
士を弔つたであらうことが想像に難くないのである。  
いつ時代なら始まつたものか、腰より下の病に靈験に感應があるといふ  
傳へられ参詣するものも少なくない。

### 沖田宮の由来

狭川一丸二番地森川正一の屋敷内一小祠がある。昔みら祭る所は阿喜多  
女と傳へられてゐる。この沖田宮にいつて花の悲話も遺つてゐる。  
この屋敷は昔沖田(阿喜多)といふ女性の屋敷跡といふ。阿喜多は元禄の  
頃鬼島湾開墾工事に普請奉行を勤めていた島前藩の士、田坂兵七郎といふ  
武家の女中奉公をしてゐた。或る年下男何某と不義のことがあつて主家の  
憤りをかみ打首にせられる處であつたが、その夫人が不憫に思ひ救され、  
田坂家を下り実家へ歸つたのである。その屋敷がこの宮祠の處だといふ。  
間もなく鬼島湾の開墾工事は進められ田坂の朝止築堤工事が出来上  
つたが、どうしたことも満潮時になると不思議に崩壊し、三度も修復した  
が堰止は容易に流るらない。現場を監督してゐた池田七郎兵衛は昔みら子の  
年、子の日、子の刻に生れた女性を生育して入柱に立てば、その力によ  
つて堤防は完備すると傳へてゐる。昔田坂兵七郎に進言した。兵七郎はもは  
や人力の施す術もなくこの上は切腹してその責任をとらなければならぬ  
と決心してゐる處へ、禊間郎に聞かされた夫人が突然あらわれ、云ふに

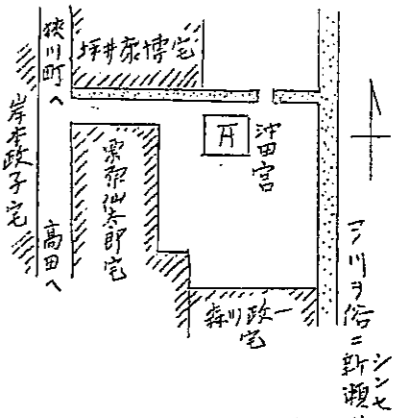
もしや子の年といへば女中奉公をしてゐたあの阿喜多の生立ちと一致して  
いるのではなからうか。と語つたので早速使者をよせて其由を阿喜多に告げ  
た處、案に違はず子歳、子日、子刻の生れであつた。使者は大いに喜ぶ主  
家の望みを語じた。阿喜多は人柱となつて生涯を終るとも私の力によつて  
工事が成就するならば何んぞ死を惜みませう、希望の至りです。と返事し  
た。子の歳は寛文十二年に當るので阿喜多は當時二十一、二歳の頃であ  
つたらうと思はれる。

阿喜多にはすでに一人の女の子が生れてゐたが主家の恩に酬ゆるの時  
あると決心した。阿喜多の夫は不憫に思ひ先のおとを遣やして現場に赴いた  
が、阿喜多はすでに白装束の姿に身をやつて彼人に附添はれて舟に乗り候  
々々岸を離れてゐた。夫は涙に咽びながら里に歸り、その日を命日と  
してその靈魂を祭つたのがこの少さな宮祠である。  
いつの頃か、秋二季には部落の手によつて祭祀が行はれてゐる。  
西之寺市四幡の沖田神社は阿喜多を祀つたといふ傳へられてゐるが、  
どうも牽強附会の説らしい。

(ここに沖田神社の由来についで池田家文書によれば、岡山藩主池田綱政の元禄四年十一月十六日に鬼島湾開墾の議が起り津田  
左源太重治郎をして見分せしめ、翌五年に徳奉行として工事を差配した。時に五十三歳であつた。しなして普請奉行に田坂兵七郎、近藤  
七助を横目付に鈴木又兵衛、石津入兵衛をよつた。堰止工事に使用した石材は鬼島湾から採取した数艘の舟によつて運搬し、  
西から東へ二番丁場、九番丁場までの九區にわけ分扱作業の方法をとり、翌四年まで、空に百二十一年間の経緯事業によつて三階、光  
政九幡、沖田、津田の五箇村に九百八十町歩の同程が漸く完成した。これを沖田といふ。

沖田神社は元禄七年四月に先づ沖田が出来上つたので一社を建て、この里の氏神にすべく京都の吉田家より正印を勧請し、船梨野佐伯  
村(山陽)の福宮金吾石見を隣居させ、新田の福宮とした。これが沖田神社である。しなして同年九月には在野の氏家に祭つた普請祠を築め  
て沖田に寄せ宮をつくり、樹木、池、堀り、ええ移し、大木は祠宮の新に當てた。十一年の宝永三年十月に始めて神領として五拾石を寄附した。

四六月二十六日を阿喜多女の命日として祭り、一月遅れて四七月二十六日には御火焚、御来迎の祭りが営まれる。(御来迎は古霊魂の出現して来り迎へること)



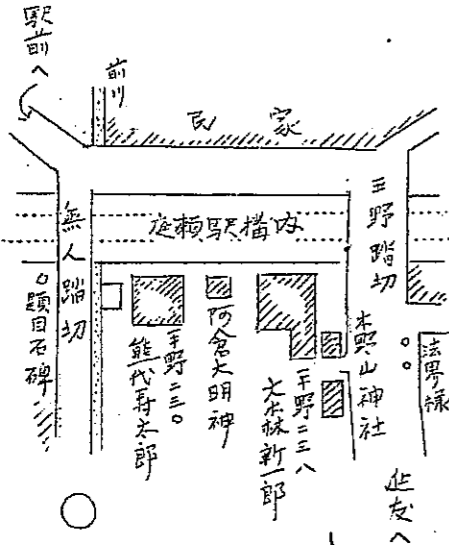
○阿倉大明神の由来

昔平野村の大庄屋に近藤吉兵衛というものがあつた。その屋敷跡は、いま熊代舟太郎の所有地となつてゐるがここに阿倉大明神の小さな祠がある。この祠は近藤家の女中阿倉女の亡霊を祭祀してゐるのである。阿倉女にフイエ一條の悲しい物語が傳はつてゐる。頃は安政年間のことである。近藤家に奉行してゐる三年、阿倉女は当年十八歳に存つた。正直な性質であつたから主人夫婦の信用を得て調度物の出入りから、金銭の出納まで委されてゐた。慶ある日夫切に死して、た慶長小判が一枚紛失した。主人はテツキリ阿倉の仕業と現心でいふ、責めたてたが、もとより身に覚えのないことだから「知りませぬ」と、返事をすまより外に道はなかつた。主人は「おまへより外に知るものはない」とえらい隙相である。ついに阿倉の母親を呼び出してその面前で泣き止む。阿倉の父親は復しい水呑百姓で阿倉が二歳の時に不治の疾で死去した。母親の手一つで育てられたので、母親は家貧とはいへ人のものを盗むような育てはして居らなからぬので、阿倉の言葉を信じてあれこれと解した。主人は「どうして身も殺して死んだのである。阿倉は主人の折檻に堪えなかつた。母親は涙ながらにその遺体を引取つて御里に帰り、野辺の送りも守りなく清ませた。一日、二日と過ぎ、初七日も過ぎた。

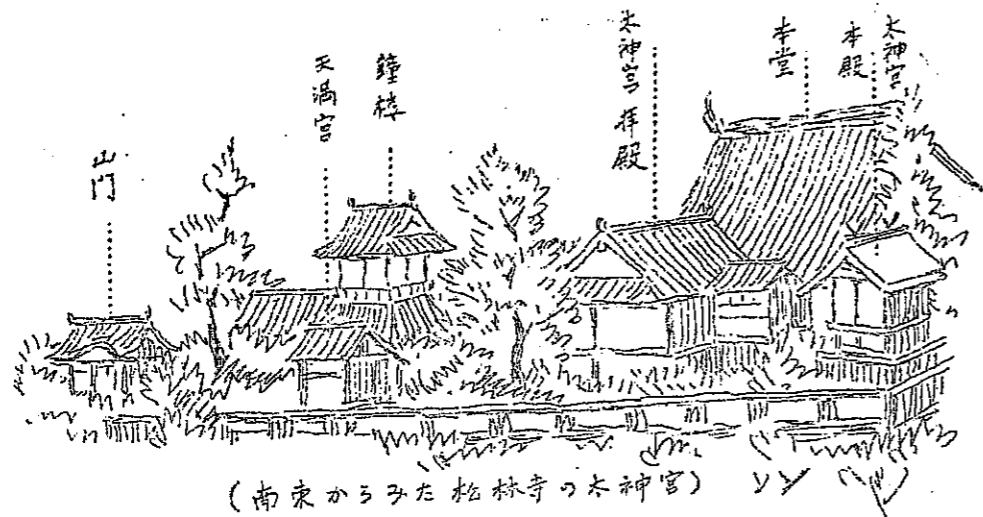
近藤家には長男を頭に二人の女子があつた。長男は十七歳になつて、いだが、生來愚昧にして人並の智能の持合せもなかつた。小判は野へてさ置きにば殖えてゆくものだと云ふ話を聞いて、小判一枚を盗んで裏の畑へ埋めて芽の出るのを待つてゐた。朝暁の放水も欠きず、盗んでいたが七日経つても、十日経つても一向に小判の芽が現れないので、念のため掘り返してみると小判はなんの変わりもなく、老沢のある黄金の老りはとのまゝの美しい姿である。息子は父親に「おれをみせて芽の出ないことを話したので、父親は驚いて「どうであつたか」と膝をたたいたが阿倉はもうこの世に帰らな女ではなく、あとの祭りであつた。その後近藤家には霊怪なことが続いて起り、若いものから先へくと怪体の知れぬ病魔にとりつかれて死んでゆく、家運は次第に傾くばかりであつた。

○近藤家の由来

近藤家は、正系は全く絶えてしまつた。須村(総社市)へ移り、更に備后の福山へ轉じて他家に嫁いだ女の傍系の後裔に穂山某といふ人があり、今岡山市に住んでゐるといふ。近藤家の墓石は了性寺の墓地に数ヶ基と又別に信城寺にもあり毎歳縁者のものが墓参してゐる。(其三幡寺陰謀中正山了性寺参照)



近命地藏尊の由来  
小西の金剛院に安置してある石地藏尊は腹部が



(南東からみた松林寺の大神宮)

大きく肥満してゐるので信に子安地藏又は延命地藏と傳へられ昔々庶民の尊信するところであつたが、近頃では賽者も稀れで香煙もあつたない。この石地藏尊の由来をたづねると小西の路傍にあつたものを居敷邸に移し、小西を達素が子孫繁栄のために小西の路傍にあつたものを居敷邸に移し、小西を達素も若死し又先祖も早死して世継が絶え、徳川へ改易してゐるので不安を感じ領内を巡探し求めてこの延命地藏尊を祭祀したのである。(延命地藏は壽命延長の菩薩であつて真言宗や天台宗では奥言密教といふ修法を行ふのである)しかし遷祀以来夜ごとくにこの地藏尊は「帰ろう」と嘆かれたりで又もとの所へ安置し、後

寺現在の御堂に祭つたといふ傳説がある。石佛に年号の銘がみられなく、寛保以前の作と思はれる。(第三輯 寺堂宇篇 岩野山剛院参照) 傳説篇は一先づこれでも完了した。

第十輯 祭典篇

御影太神宮の同帳会式について  
 松林寺の鎮守である御影太神宮の同帳は今中絶のなごりになつてゐるが、その起源は古く藩政時代には地方稀れにみる盛大な祭典が辰の歳の十三年目毎の春日三月廿五日から一箇月に亘つて執行せられたといふ。それ以後藩政後、明治の時代になつて藩主校倉氏の庇護は絶え、寺の経営も漸く困難をきたす状態となつて法嗣十八代總門拓大和尙の明治十三年の庚辰の歳から一週間に祭典が縮められ、ついに大正五年の丙辰の歳の行事を最後として中止せられたのである。

この祭典の模様をたづねると当日は本殿を圍雇して一般の参詣者に拝観が許されたので地方々々の善男善女は早朝から雲集し、境内は立錫の余地もない位に賑ふのである。

境内の南側に接して三段歩の田圃がある。これは四藩主校倉氏が同堂料として寄進せられたものである。同帳の年にはこの田圃に興行物や見世物露店などの天幕が狭いまでに張りめぐらされ、終夜参詣客で雑沓を呈するのである。往時は数町歩の寺領を所有し、そのほかに別途會計として毎年十石あまりの收入を御影太神宮の諸経費に充てて居り、これを十三年高積して式典が催されたのである。現在の物価に換算すれば米一升百円とみて、実に百三十万円の巨額に達する金額になる筈である。如何に盛大な儀式が執行されたか、窺はれるのである。

人間に階級制度のあつた封建時代に町人百姓は腰をぬかぬで参詣する存在を武士は大小を腰にたはさんで着て参詣する切りなから入波に混つて活歩した警衛姿が想像せられるではないか。

どの寺院も同様であるが、昭和廿一年の震地改革によつて寺領も同様であるが、田畑は悉く手放し、僅かに三段歩ばかりが保有を許されたので、寺院の維持は益々困難する事態に陥り、この祭典も復活の見込みはなく、徒らに往時を追懐するに過ぎないのである。(第三輯 寺堂宇篇 清山松林寺御影太神宮の由来参照)

祭典篇についてはこのほか住吉祭、祇園祭、摩利支天の例祭、魁子母神の例祭、天満宮の夏祭、庚申様の祭など、沢山あるが、これらも社寺の部に入れた。

○ 鬼子母神の祭典について

鬼子母神は信城寺の鎮守にしてこの尊像の由来にフッて寺傳によれば、永享元年(一四三九)の頃、日蓮宗の中興の祖といはれる久遠院日親上人が時の將軍足利義教のために、篤度公法難に遭ひ迫害せられんとした。その都度鬼子母神の加護によつて危難を免れたといふ靈蹟に感得し、齋戒沐浴して自ら彫刻せられた尊像である。法華秘通のために永く護身佛として奉持したのであるが、聖人は長享二年(中九月十七日)八十二歳の高齡で遷化せられた。まづこの尊像は法華信徒の間に傳はり天正の頃に常山城主戸川肥右衛門秀安の室、信城院殿日友神尼が法華宗に帰依して、たのでそのもとに納まり、尼は護身佛として日夜祈禱怠りなく崇信して、たが秀安の没后尼となり墨染の法衣に身を穿し、この地に隠棲して法華三昧の境遇にあつたと傳へられる由緒の深い尊像である。

最初の草庵は今の中島あたりに結んだといはれ、此寺院に取立てられて現地に再興したといふ説がある。

(高きと、種日友尼の牌は平堂内陣に安置せられ、その墓石は蓮華形に、ともと境内にあつたが後方に鉢尾の盛隆寺の古人家の御廟所に移葬した)。

鬼子母神の例祭は五、八、十月の七日に行はれるが、殊に八月七日の夏祭は盛大にして当日は寺の前の本町筋は数十軒の露店が張られ、夕方から子供を連れた浴衣姿の参詣客が織るが如く、境内は雑音を極めるのである。

鬼子母神といふ神様は古來多くの日蓮宗の寺院に祀られる神様で、俗に産婆守護とて崇信せられる。鬼子母神とは如何なる神様か、その起源について物語がある。

太古この世の中に佛様の出現しない以前に印度に犍覺といふ神様があつて一日遊行托鉢(僧侶が鉢をて街家を巡り、米銭を乞ふもの)して王舎城へ来た。この時以前の懷妊した牡牛女が疲勞して路傍に倒れ胎児を流産してゐるのに民衆はその苦惱を見ながらうたれどとして救うとしない。皆山中へ逃げて

まつた。この牡牛女は獨覺の姿をみて足下に平伏して救を求めた。犍覺は静かに大自然を觀察し人生を悟つてはいるが、それはただ自己の悟りの内だけであつて、その悟りを人々に説いて共に佛道に導くことを知らなかつた。そこで犍覺は雪白の鳥と化して空中に飛去つた。牡牛女は深い感動を受け、悪念に誘はれ來世は王舎城内に生れ、自分の不幸を見捨てていつた人達の子孫を食ひ盡さうと大惡願を決意した。それなら後時代が過ぎて王舎城内に夜叉神として生れた。(犍覺を鬼神)夜叉神が生れると、山嶽は鳴動し奇蹟が現れたので名を歡喜と呼んだ。歡喜は美しい女となり隨所に出没して手あたり次第に人の子を取つて食つた。城内は恐怖に早速佛様の許へ走つて歡喜居伏の祈願をした。そこで佛様は住民をおはれに思ひ、明朝乞食になつて歡喜の所へつた。歡喜には五百人の子供の母親であつたので、子供のうち一番少い子を托鉢のなかにみくして得た。歡喜は一番可愛かつてゐる妻の子がみえないので、牧馬の諸方を探して求めたが見当らない。狂者となつて愛鬼の名を呼ばながら天上界から下地獄に至るまで母界中を彷徨した。この時多聞天の玉足沙門は歡喜の狂乱して騒ぎ廻る姿をみて憫み「歡喜にお頼みすれば愛鬼の行方はわかる」と教へた。歡喜は親等の止めに頼つて「心の苦惱をお赦して下さい」と頼つた。汝は五百人もある子なら一人位なくなつても左程悲しむことはないだろう」とはれた。「いえ私はあの子の類をみないと慈母を思ひかれません」と答へた。「お前は人の子を取つて食ふさうだが、自分の子供が一人いなくなつてもそれ程悲しく思ふならは、取り食された人達はどんなに嘆き悲んでゐるかわらない。お前は今日限り悪行を改め、佛法の信者となるならば可愛い子を返してやう」と、かくして罰した子供を返し、それに一血の食を與へ「お前は五百人の子供にわけがよ、決して人間を食つてはならぬ」と禁せられ、以来鬼子母神として崇敬せられ佛法擁護の神になつたといふ。

魚進

鮮魚・酒類・氷卸小賣  
山岸本商店  
本店 西花尻・支店本町  
TEL 120, 乙

ビナ  
家具製作  
室内装飾

本社工場  
都窪郡吉備町庭瀬  
電話(吉備局)三一三番  
岡山営業所  
電話(岡局)  
②七七〇七番